

Mādhava の著作手法

—Sarvadarśanasamgraha, 第7章 Śaivadarśanam
及び第8章 Pratyabhijñādarśanam の場合—

武 田 耕 道

1. Mādhava の Sarvadarśanasamgraha は、全16章より構成され、第6章から第9章まではシヴァ教に関する諸派が取扱われている。本稿では、このうち第7章と第8章とを取挙げて、Mādhava の著作手法ないし著作手順について、先人の研究に頼りつつ考察したい。

2. E. B. Cowell と A. E. Gough (I-XV)¹⁾, Sylvain Lévi (VI-VII)²⁾, そして P. Deussen (I-IX)³⁾等によつて Sarvadarśanasamgraha は部分訳されている。また数章を日本語訳された中村元氏は、Beiträge zur Geistesgeschichte Indiens, Festschrift für Erich Frauwallner, wien, 1968 の中に収められた論文 Some notes on the Sarvadarśanasamgraha, pp. 241-251 の中で、日本語訳についての詳しい目録と notes とを記している。

3. E. B. Cowell は先に挙げた英訳書の序文の中で、

In one or two cases (as notably in the Bauddha, and perhaps in the Jaina⁴⁾ system) he could only draw his materials second-hand from the discussions in the works of Brahmanical controversialists; but in the great majority he quotes directly from the works of their founders or leading exponents, and he is continually following in their track even where he does not quote their exact words (p. ix).

と、記している。また原実氏は第6章 Nakulīśa-Pāśupata-darśanam について、

1) E. B. Cowell and A. E. Gough, The Sarvadarśanasamgraha, or Review of the different systems of Hirdu Philosophy by Mādhava Āchārya, Chowkhamba Sanskrit Series Studies, vol. X, Varanas, 6th ed. 1961.

2) Sylvain Lévi, Deux chapitres de Sarvadarśanasamgraha (Bibliothèque de l'École des Hautes Études, Sciences religieuses, I), pp. 281ff. (Paris, 1889).

3) P. Deussen, Allgemeine Geschichte der Philosophie mit besonderer Berücksichtigung der Religionen, I, 3, pp. 190-344.

4) cf. Hajime Nakamura, Notes on the third chapter (on Jainism) of the Sarvadarśanasamgraha (PRATIDĀNAM, The Hague, 1968, pp. 510-515), 特に p. 514.

精緻な研究 (Minoru Hara: *Nakulīśa-Pāśupata-darśanam*, *Indo-Iranian Journal*, vol. II, 1958, pp. 8-32) をおこない、その中で次のように書いている。

Perhaps the chief value of such a work as is here presented lies in the light it throws on Mādhava's method of composition. It seems to me likely that what can be shown of the "Nakulīśa-pāśupata-darśana" will be found true of the other chapters of *Sarvadarśanasamgraha* also. That is, it was Mādhava's practice to take two or three basic texts of the system, quote a number of their basic definitions word for word, summarize a number of secondary doctrines in a manner as close to the original as brevity would permit and then emboss the whole between an introductory paragraph and a concluding summary (p. 11).

そして、第 6 章において Mādhava が引用典拠の基本文献としたものは、Pāśupatasūtra に対する Kaunḍinya の注釈文献 *Pañcārthabhāṣya* と *Gaṇakārikā* に対する注釈文献 *Ratnaṭikā* とである、と言っている (pp. 8-9)。

Nakulīśa-pāśupata-darśanam に関して、原実氏の指摘されたこのような Mādhava の著作手法は、第 7 章と第 8 章においてもほぼ同じである。つまり、基本文献からその学派に核心的な内容を字句どおりに引用している、ということである。しかしながら、第 7 章と第 8 章とではその著作手順に幾分の相違が見られる。この 2 点を、*Sarvadarśanasamgraha* の本文とその依拠した基本文献とを比較対照することによつて考察したい。

4. 表 [I] の左欄は SDS 第 7 章より偈頌の部分だけを抽出した行数を、そして右欄は MT と TP とからこれに対応する箇所を示したものである。? 印は対応箇所の trace 出来なかつたことを示し、また注釈の部分の比較対応は除いた⁵⁾。

〔表 I〕

SDS 第 7 章の行数	MT と TP とに見られる対応箇所とその行数
ll. 6-7	MT (<i>Vidyāpāda</i>) II 2 p. 52 ll. 2-5
l. 33	MT p. 102 ll. 12-13
ll. 39-40	MT p. 110 ll. 6-7
ll. 44-45	MT p. 112 ll. 9-10 (<i>Bṛhaspati</i>)
ll. 47-48	?
ll. 51-52	MT (<i>Vidyāpāda</i>) V 13 p. 142 ll. 18-19 p. 143 ll. 1-2
l. 64	MT (<i>Vidyāpāda</i>) III 8ab p. 113 ll. 7-8

5) Mādhava 自身による言葉の入れ替えや語句の異同については、詳細な比較研究と和訳と共に別稿に記したい。

ll. 66-67	MT (Vidyāpāda) III 8cd 9ab p. 114 ll. 5-8
l. 72	MT p. 114 l. 16 or p. 145 l. 18 (Pauṣkara)
ll. 74-75	?
ll. 77-78	TP I 7 p. 44 ll. 18-19
l. 81	MT p. 127 l. (Śrīmatkaraṇa)
ll. 90-91	MT p. 153 ll. 6-7
ll. 94-95	MT p. 160
l. 99	MT (Vidyāpāda) VI 7d p. 160 l. 11
ll. 100-101	MT (Vidyāpāda) II 5 p. 55 ll. 7-10
ll. 103-104	TP I 6 p. 42 ll. 5-6
ll. 115-117	MT (Vidyāpāda) IV 3 4ab p. 122 ll. 8-13 (Bahudai- vatya?)
ll. 120-125	TP I 8 9 10 p. 46 ll. 6-7 p. 48 ll. 19-20 p. 49 ll. 13-14
ll. 127-130	? (Somaśambhu)
ll. 134-135	TP I 11 p. 50 ll. 5-6
l. 137	TP I 12cd p. 50 l. 8
ll. 141-142	Tattvasaṃgraha of Sadyojyoti 25ab cf. SP p. 117
ll. 148-149	cf. SP p. 117 (Kālotara)
l. 157	TP I 12ab p. 50 l. 7
ll. 161-164	TP I 13 14 p. 50 ll. 9-10 p. 52 ll. 11-12
ll. 167-168	TP I 15 p. 53 ll. 22-23
l. 170	MT (Vidyāpāda) II 1cd p. 48 ll. 3-4
ll. 174-175	TP I 16 p. 54 ll. 20-21
ll. 178-179	TP I 5 p. 23 ll. 18-19
ll. 183-184	TP I 17a p. 55 l. 5
ll. 185-186	MT (Vidyāpāda) II 7 p. 57 ll. 8-11
ll. 190-191	TP I 18 p. 56 ll. 8-9
ll. 194-195	MT (Vidyāpāda) VII 11 p. 170 ll. 13-16
ll. 198-199	MT p. 167 ll. 18-19 (Śrīmatkīraṇa)
ll. 202-203	MT p. 58 ll. 6-7 (Śrīmatsaurabheya)
ll. 206-207	? (Jñānaratnāvali)

5. 第7章の場合と同じく、SDS 第8章から偈頌の部分だけを抽出し、これに対応する箇所を IPV から引用すれば次表〔Ⅱ〕となる。

〔表Ⅱ〕

SDS 第8章の行数	IPV に見られる対応箇所とその行数
ll. 10-11	?
ll. 13-16	IPV (vol. I) I i 1 p. 5 ll. 5-6 p. 6 ll. 1-2

ll. 28-31	IPV (") p. 15 ll. 4-8 (=ŚD VII 5cd 6 5ab p. 209)
ll. 41-42	IPV (") p. 17 ll. 12-13 (=Śivastotravalī of Utpaladeva XX 11)
ll. 62-65	IPV (") I i 2 p. 29 ll. 4-6; IPV (") I i 3 p. 35 ll. 7-8
ll. 67-72	IPV (") I i 4 p. 39 ll. 9-11; IPV (") I i 5 p. 45 ll. 1-2; IPV (") I vii 1 p. 277 ll. 1-4
l. 74	ŚD v 106ab p. 194
ll. 76-79	IPV (") I viii 10 p. 336 ll. 11-14; IPV (") I viii 11 p. 337 ll. 1-2
ll. 90-91	IPV (vol. II) II iv 1 p. 136 ll. 3-6
ll. 93-96	IPV (") II iv 21 p. 183 ll. 2-5; IPV (") II iv 14 p. 168 ll. 1-4
ll. 102-103	IPV (") II iv 10 p. 150 ll. 9-10 p. 151 ll. 1-2
ll. 115-116	IPV (") p. 153 ll. 12-13 Stavacintāmaṇi of Bhaṭtanārāyaṇa 9)
ll. 119-120	IPV (") III ii 2 p. 218 ll. 6-9
ll. 123-124	IPV (") IV i 13 p. 267 ll. 12-15
ll. 144-147	IPV (") IV ii 2 p. 273 ll. 16-17 p. 273 ll. 1-6

6. 表 [I] によつて, Mādhava が SDS 第 7 章を作成するに際して, 基本文献として Mṛgendratāntra と Tattvapraśāsa とを選び⁶⁾, 表 [II] によつて SDS 第 8 章を作成する場合には, Abhinavagupta の Īśvarapratyabhijñā-vimarśinī のみを基本文献として利用したことが明白となる。

しかしながら, 第 7 章と第 8 章との間には次のような著作手順の相違が見られる。第 8 章においては IPV からの引用は, 表 [II] に見られるごとく,

I, i, 1~5; vii, 1; viii, 10~11; II, iv, 1, 21, 14, 10; III, ii 2; IV, i, 13; ii, 2.

である。IPV 全体からほぼ章節の順序に従つて引用している。一方, 第 7 章においては, TP からの引用は I 5~17 であり, MT からの引用は Vidyāpāda の

6) Mādhava が SDS 第 7 章を作成するとき, 主として MT と TP に基づいていることは確かである。しかし, この二つの作品に基づいた Aghoraśivācārya の著作, Mṛgendratāntra か Tattvapraśāsa に対する注釈書あるいは Aghoraśivapaddhati (別名 Kriyākramadyotikā) のいずれか一書に Mādhava が基づいた, と考えられる可能性もある。だから, 第 7 章については第 8 章のごとく基本文献を確定することはできない。cf. SDS 第 7 章, ll. 133-151; SP, pp. 116-117.

みに限られ、しかもその箇所は表 [I] によつて、

II, 2; V, 13; III, 8; VI, 7d; II, 5; II, 1cd; II, 7; VII, 11.

である。Mādhava は、MT から章節の順序に従わず不規則に引用している。以上の比較対照は偈頌の部分についてであるが、注釈の部分に関しても、第 8 章においては IPV との対応箇所が容易に見出すことができる⁷⁾。しかし、第 7 章については対応箇所を trace することがいささか困難であり、Mādhava のアレンジの程度が第 8 章に比較して多いように思われる⁸⁾。

7. 第 7 章では MT, TP の外に Bṛhaspati, Pauṣkara, Śrīmatkaraṇa, Śrīmatkīraṇa そして Śrīmatasaurabheya 等の作者や作品が見られ、第 8 章では IPV の外に Śīvastotravalī や Stavacintāmaṇi 等からの引用が見られる。しかし、これらの引用文は、基本文献である Mrgendratantra-vṛtti や Īśvarapratyabhijñāvimarśīni の中から trace できる。つまり、Mādhava はこれらの作品を直接に引用したのではなくて、間接にいわば孫引的に利用したものと思われる。

8. SDS 第 7 章、第 8 章に限定すれば、Mādhava の著作手法についての特徴は次の諸点が考えられる。

- a). 基本文献を一つか二つに限定した⁹⁾。
- b). この基本文献からほとんど字句どおりに引用した¹⁰⁾。
- c). 基本文献以外の作品が引用されていても、これらは基本文献の中にすでに引用された作品であるから、Mādhava はこれらを間接的に引用したものと思われる。だから、SDS の中の引用文献群は直接典拠の第一次文献 (基本文献)

7) 例えば、SDS 第 8 章 II, 12-31 は、IPV (vol. I) p. 5 ll. 5-6; p. 6 ll. 1-2; p. 12 ll. 8-10; p. 12 l. 12; p. 13 ll. 1-4; p. 13 l. 8 p. 14 ll. 1-14; p. 15 ll. 3-9 に対応する。

8) SDS 第 7 章 II, 21-40 は、MT-vṛtti p. 98 ll. 14-19 p. 99 ll. 1-2; p. 99 ll. 8-16; p. 102 ll. 12-13; p. 110 ll. 2-8 にだいたい対応している。

9) しかしながら、Mādhava の各 darśanam への関わり方ないし著作手法はそれぞれ幾分ずつ色合いが異なる。つまり引用典拠としての基本文献を容易に決定できる darśanam とその困難なものがある。

10) Mādhava 自身による、言葉の入れ替えや簡略化あるいは敷衍が見られるので必ずしも文字どおりであるとは言えない。cf. 今西順吉、マードヴァ『全哲学綱要』の一考察——第十四章『サーンキヤ哲学』の文献学的研究 (古代学, vol. XII No. 2/3, 1965), pp. 107-108.

と間接典拠としての第二次文献とから構成されている。

- d). 第7章において, Mādhava は MT の Vidyāpāda の部分からのみ引用しており, Kriyāpāda, Caryāpāda そして Yogapāda からの引用は見られない。これは “darśanam” という本書の主旨に由来しているのであろう。
9. Mādhava の Sarvadarśanasamgraha が, モザイク的な著作手法によつて作成された書物であり, ダイジェストであり, 通観的研究書¹¹⁾であり, 一種の「哲学概論」であり, あるいはまた彼は公平な客観的論述¹²⁾をしている, と言っているのは上述の Mādhava の著作手法の3点 (a, b, c) に起因すると思う¹³⁾。

略号

SDS: Sarvadarśanasamgraha, ed. by Vasudev Shastri Abhyankar, Government Oriental Series class A, No. 4, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1915.

KSTS: Kashmir Series of Texts and Studies.

MT: Mṛgendratāntra (Vidyāpāda and Yogapāda), ed. with the vṛtti of Nārāyaṇakaṇṭha by M. K. Shastri, KSTS, No. 50, Bombay, 1930.

TP: Tattvapra-kāśa of Bhojadeva, ed. with the tātparyadīpikā of Śrīkumāra by T. G. Shastri, Trivandrum Sanskrit Series, No. 68, 1920.

SP: Somaśambhupaddhati, tr. introd. et notes par Hélène Brunner-Lachaux, Publications de l'Institut Français d'Indologie, No. 25, Pondichéry, 1963.

IPV: Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta, vol. I, ed. by M. R. Shastri, KSTS, No. 22, Bombay, 1918; vol. II ed. by M. K. Shastri, KSTS, No. 33, Bombay, 1921.

ŚD: Śīvadṛṣṭi of Somānanda, ed. with the vṛtti of Utpaladeva by M. Kaul Shastri, KSTS, No. 54, Srinagar, 1934.

11) 前田専学, Nārāyaṇa の Kenopaniṣaddīpikā (印度学仏教学研究, vol. XX No. 2, 1972), pp. 97-98.

12) 中村元, インド思想の諸問題, 春秋社, 1967, p. 254.

13) 各 darśanam の内容を一々検討していけば, Mādhava のアレンジの程度に応じて, 正確性を欠き全くの外れの個所もある。cf. 今西順吉, op. cit., p. 103.